The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	催眠感受性の研究
Author(s)	夏目, 誠
Citation	大阪大学, 1978, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/31986
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【30】

氏名・(本籍)	夏目　誠（なつめ　まこと）
学位の種類	医学博士
学位記番号	第　4158　号
学位授与の日付	昭和53年2月22日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**催眠感受性の研究**
論文審査委員	(主査) 教授 金子　仁郎
	(副査) 教授 岩間　吉也　教授 中山　昭雄

論文内容の要旨

〔目　的〕

催眠は，一定の暗示操作に基づく，意図的，人為的な注意集中によって引き起こされる特殊な心身の状態であり，これを催眠状態，あるいは，hypnotic-tranceと呼んでいる。催眠感受性は，催眠誘導や催眠深化の暗示に対するレディネス，すなわち，催眠状態への導入されやすさであり，通常，暗示に対する反応の度合いにより把握される。このような催眠感受性に関与する要因として，被催眠者（被験者）の年令，性別，知能，性格，動機づけ，催眠者（検者）の催眠誘導経験，被験者との面識や権威性，また，催眠誘導回数が考えられる。

一方，催眠感受性が被催眠者個人の能力的要素であるとすれば，これは，被催眠者の種々の刺激場面での精神生理学的反応と相関をもつものと想定できる。しかし，これについての報告は少なく，ことに，催眠感受性について，心理学，および精神生理学の両面からアプローチし，検討を加えた報告はない。

著者は，催眠感受性に関与すると考えられる被験者，検者，催眠回数などの要因，催眠感受性と被験者の性格行動の特徴との関連，および，催眠感受性と被験者の精神生理的反応との相関につき，心身相関の立場から，心理学的，ならびに精神生理学的方法を用いて研究を行った。

〔方法および成績〕

催眠感受性に関与する心理的要因として，検者，被験者，催眠回数を想定し，高等看護学生を対象とし，催眠誘導経験，被験者との面識や権威性の異なる4名の検者が4名の被験者を催眠に誘導した。ラテン方格を使用した統計的検討により，検者間や催眠回数に差はなく，被験者間にのみ有意な差が

認められた。

ついで，70名の高等看護学生を対象として1名の検者が同様な方法で催眠に誘導し，あわせてY—Gテスト，行動評価を行い，催眠感受性と性格行動の特徴との関連をみた。因子分析法で，催眠暗示項目から4因子が，性格行動テスト項目から6因子が抽出され，その相関を調べたところ，催眠中核因子と受動性因子（受動性，消極性，内向性等）との間に，統計的に有意な相関がみられた。正準相関を用いても，催眠感受性は依存性，消極性，受動性，従順服従性に関連深いことがわかった。

精神生理学的研究として，高等看護学生36名を催眠感受性得点により，高，中，低得点群の3群に分類し，指示暗算，自己暗算，光，音，スライド刺激の際の精神生理学的反応をしらべるために，脳波，顔面表情筋々電図，水平眼球運動，ＧＳＲ，指尖容積脈波，脈拍などのポリグラフの記録を実施した。

高得点群は，低得点群に比し，安静時に各精神生理学的指標が安定しており，心身の弛緩がみられた。刺激時には各刺激に反応しているが，指示暗算，自己暗算刺激で，低得点群に比し，顔面表情筋であるM. corrugator supercilli，M. mentalisが有意な差（指示暗算で，M. corrugator supercilli $P<0.01$，M. mentalis $P<0.05$，自己暗算で，$P<0.05$）をもって，筋放電の増加がみられ，脈波の平均振幅減少率も有意な差（$P<0.05$）をもって高かった。そして刺激に対する慣れ（$P<0.05$）もみられた。これに対して，低得点群は高得点群と反対の傾向を示した。このことは，催眠感受性の高い群は，心身の弛緩，刺激の受容，注意集中が良好で，刺激に対する反応に「容易性」を有するこのを示す。

〔総　　括〕

本研究の結論は次の4点である。

1）催眠感受性は，被催眠者側の要因と，深い関連があり，催眠者側の要因，催眠回数との関連がほとんどなかった。

2）催眠感受性は，依存性，消極性，受動性，従順服従性などの被催眠者の性格行動の特徴と高い相関があった。

3）催眠感受性とポリグラフを用いて記録した各種刺激に対する精神生理学的反応との関連では，催眠感受性と指示暗算，自己暗算中におけるM. corrugator supercilliとM. mentalis，および，指尖容積脈波の反応が有意な相関を示した。

4）催眠で必要とされる心身の弛緩，刺激の受容，注意集中，刺激に対する反応が，高得点群では「容易性」を有することを，心理学的，ならびに精神生理学的研究により把握した。

論文の審査結果の要旨

本論文は，催眠感受性に関与する諸要因について，心理学的，精神生理学的実験を行ったものである。

主な新事実は，次の２点である。(1)催眠感受性は，被催眠者の属性と関連があり，また，被催眠者の受動性，依存性，消極性などの性格行動の特徴と相関が高いこと。(2)催眠感受性の高い群は，安静時に，各精神生理学的指標が安定しており，刺激に対しては，催眠感受性の低い群に比し，表情筋である皺眉筋，頤筋と指尖容積脈波の反応が大であり，刺激に対する慣れもみられた。

本論文は，催眠感受性を理解するために，重要な資料となり，学位論文として，価値があるものと認める。